

## 学級内地位認知に関する研究

有 倉 巳 幸 [鹿児島大学教育学系 (教育実践総合センター)]

### A study on position recognition in class

YUKURA Miyuki

キーワード：学級内地位認知、仲間集団、関係形成・維持動機、学級適応感

いじめは、文部科学省の定義（2006 年）によれば、「当該児童生徒が、一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」とされている。この定義は、それ以前の定義（1994 年）よりも、いじめる者といじめられる者の関係性が不明瞭になっている。それだけ、近年のいじめは、状況的にも立場的にも流動的になってきたと言える。しかし、いじめがけんかとは違うのは、少なくともその行為が行われている時点で、いじめられる側がいじめる側に立ち向かうことができない点であり、この点で言えば、ハラスメントやDV（ドメスティックバイオレンス）なども同様の行為と言える。

ところで、学級内で起こるいじめや暴力と攻撃行動の問題については、その学級内における排他的な仲間集団であるクリーク(*cliques*)の階層性(*hierarchy*)との関連が明らかになっている(*c.f.*, Pattiselanno, Dijkstra, Steglich, Vollebergh, & Veenstra, 2015; Garandau, Lee, & Salmivalli, 2013; Garandau, Ahn, & Rodkin, 2011)。Garandau ら(2013)は、青年期に自然に現れてくる仲間集団における地位の階層性が将来の集団内攻撃を防ぐ役割を果たすという見解に対して、この利点に関する知見が欠けていたとし、ミドルスクールの生徒（日本で言う中学生）を対象に、学級の地位階層化の程度といじめ行動との関連性を、縦断的に検討した。マルチレベル構造方程式モデリング分析を用いて分析したところ、地位階層化が進んでいる学級ほど、年度末にいじめが起こっていることが示された。また、年度途中で階層化が進んでいるほど、年度の終わり頃にいじめが起こりやすいことを予測した。さらには、最初にいじめが将来の階層化を予測するかどうかについては証拠が得られなかったとした。

また、Pattiselanno ら(2015)は、ミドルスクールの青年（平均年齢 14.02 歳）2674 名を対象に、本人の社会的地位と攻撃行動及び向社会的行動との関係を媒介するクリークの階層性の役割について検討を行った。調査では、回答者に学級内にいる仲間を指名(*nominate*)させ、*clique overlap analysis*(Borgatti, Everett, & Johnson, 2013)という手法を使って、534 の仲間集団を特定した。回答者には、自身の社会的地位の高さや攻撃行動、向社会的行動などについて尋ね、また、回答からクリーク地位 (*cliques status* ; より大きな仲間集団の文脈におけるクリークの全体的な地位)、クリークのサイズ (人数)、クリークの階層性、クリークの階層構造を算出した。その結果、女子においては、クリークの階層構造がピラミッド型 (少数の上位者と多数の下位者からなる仲間集団) である場合より、逆ピラミッド型 (多数の上位者と少数の下位者からなる仲間集団) である場合の方が、社会的地位の高さが攻撃行動を高めて

いた。

以上のように、海外の研究では、学級集団及び学級内の仲間集団で形成される地位階層化の程度や階層構造がいじめや学業成績との関連が明らかになっているが、本邦ではまだ、こうした研究は少ない。最近、マスコミやネット上でスクールカーストという現象が取り上げられることもあり、教育社会学や心理学の一部でこうした研究が散見されるようになってきた。たとえば、森口(2007)は、『いじめの構造』という著書の中で、スクールカーストという概念を持ちだし、人気があるか、モテるかによって地位が決まっていることを指摘した。鈴木(2012)は、同学年の児童や生徒の間で共有されている「地位の差」を、スクールカーストと呼び、鈴木・須藤・荒川・寺田・澁谷(2011)で使用した中学2年生を対象に行った調査データをもとに、クラスの人気者であるかどうかの自己評価で、上位層、中位層、下位層の3群に分け、学校への適応感やクラス内コミュニケーションとの関係について検討した。その結果、上位層は、中位層や下位層より学校生活の満足度が高く、自己主張が強いことを明らかにした。また、大学生への回顧的インタビューを通して、小学校と中学校のスクールカーストの違いも記述している。それによると、小学校では、クラス全体の中で、いじめられていたり嫌われていたりする児童を「地位」の低い児童と捉えており、みんなから人気のある、みんなでする遊びのうまい児童を「地位」の高い児童と捉える傾向があると示唆している。これに対して、中学校以降では、個々の生徒が何からのグループに所属し、それぞれのグループに名前をつけて、グループ間で「地位の差」を把握していることを示唆している。

池田(2013)は、中等教育学校(中学2年生～高校2年生)を対象に、授業中の発言の有無と内容、サブカルチャーの内容、学級集団内での友人に対する意識など5つの観点からホット群、ミドル群、クール群の3群に分けて検討を行った。その結果、ホット群は、学級内で孤独感を感じることなく5人以上の友人がおり、授業中、授業とは関係のない話をする傾向があること、逆に、クール群は、学級内で孤独感を覚え、友人はいてもわずかであり、授業に関連する発言が多く、勉強は得意であるといった特徴を明らかにした。

本研究では、これらの知見を踏まえ、学級内地位認知が仲間集団の形成・維持動機や、学級および所属している仲間集団に対する意識や行動、学級適応感覚に及ぼす効果を検討することを目的とする。その際、男子の仲間集団と女子の仲間集団では、集団サイズや構造において質的に異なることが示唆されているため、性の効果も併せて検討する。

仮説は次のとおりである。上位群は、中位群や下位群と比べ、多様な人間関係を持ち、友だちも多いという知見(鈴木, 2012; 池田, 2013)から、仲間集団の形成・維持において積極動機が高く(仮説1)、適応感覚が高いただろう(仮説2)と考えられる。逆に、下位群は、友だちが少なく、仲間集団における行動も同調的であり、仲間関係も閉じたものになりがちであることから、消極動機が高いただろうと考えられる(仮説3)。学級および所属している仲間集団に対する意識や行動については、探索的に検討を行うこととする。

## 【方法】

**調査対象者** 鹿児島県内の公立中学校2校(いずれの学校も全校生徒650人前後であり全て1学年6学級)の中学1, 2年生の813名を対象とした(注1)。このうち、調査に同意した797名(中学1年395名、うち男子191名、女子204名、中学2年400名、うち男子196名、女子204名、他不明2名)を分析対象とした。なお、同意について回答しなかった者を含め、回答拒否は16名(2%)であった。

**調査時期** 2014 年 12 月初旬

**調査内容と質問紙の構成** 性別及び学年に加え、調査内容は大きく 5 つの点から構成された。掲載順に、①携帯電話等のインターネットが接続できる機器の所有及び LINE 等の使用状況（所有の状況、使用時間）を 4 項目、部活動・委員会の所属状況 4 項目、②学級内で授業外の時間を一緒に過ごす友人数（姓のみミニシヤルで記させ、人数をカウント、なお、同一イニシヤルの場合、アルファベットの右に 1, 2 と付記）、その仲間集団に対する評価及び自己評価（かけがえのなさ、重要度、魅力度、所属集団のクラス内影響度、グループ内影響度、自身のグループ内での影響度、自身の学級内での影響度）各 1 項目、③学級内地位（鈴木(2012)及び池田(2013)をもとに作成した、クラスでの自身の状況に関する三つの文章から自分に最も近いと思うものを一つ選ばせる）1 項目（appendix 参照）、④仲間集団の形成・維持動機（石田・小島(2009)を一部改変して作成）18 項目、⑤学級及び仲間集団での自身の意識や行動に関する自己評価 12 項目（鈴木(2012)及び池田(2013)をもとに、人間関係の敏感さ、他グループとの肯定的な関わり、学級内階層性の 3 因子を仮定；「クラス内の人間関係には敏感でない」、「自分が所属していないグループの人とも積極的に関わっている」、「このクラスにいる間は、このままの人間関係を維持したい」などの項目）、⑥階層型学級適応感尺度（三島(2006)を一部改変して作成）15 項目であり、①は、選択肢から一つを選ばせ、使用時間を尋ねた。④は、4 件法、それ以外は 5 件法であった。また、本調査では、項目の提示順序の影響を統制するため、3 種類の冊子を作り、ランダムに配布できるように工夫した。

**手続き** 学校への依頼公文により許可を得た学校の各学級担任に配布を依頼し、実施した。回答に際しては、表紙の説明を読んでもらった後、同意に回答してもらった上で、回答させるように依頼した。

## 【結果】

### 本標本における携帯電話等の所有・使用状況

分析にあたっては、その都度、欠損値を除いて行ったので、有効回答数は分析によって異なっていた。まず、携帯電話等の所有状況であるが、有効回答 786 名中、自分専用を所有している者は 332 名 (42.2%) であり、親を含めた家族共用と回答した者は 289 名 (36.8%) であった。使用していない者は、165 名 (21.0%) であった。クロス集計を行ったところ、2 年生 (98 名, 24.9%) の方が 1 年生 (67 名, 17.1%) より所有していない者が多く ( $\chi^2(2)=10.17, p<.01$ )、女子 (184 名, 45.8%) の方が男子 (148 名, 38.5%) より自分用を持っている者が多かった ( $\chi^2(2)=11.92, p<.01$ )。携帯電話等について 1 週間平均した 1 日あたりの平均使用時間 (分) は、自分用を所有している者は 170.42 分 ( $SD=171.36$  ;  $Me=120.00$ )、家族共用と回答した者は 117.42 分 ( $SD=177.50$  ;  $Me=60.00$ ) であった (注2)。

また、LINE 等のアプリを使用している者は、有効回答 763 名中 346 名 (45.3%) であり、クロス集計を行ったところ、2 年生 (190 名, 49.0%) の方が 1 年生 (156 名, 41.6%) より使用している者が多く ( $\chi^2(1)=4.18, p<.05$ )、女子 (215 名, 54.4%) の方が男子 (131 名, 35.6%) より使用している者が多かった ( $\chi^2(1)=27.26, p<.001$ )。使用者の 1 週間平均した 1 日あたりの平均使用時間 (分) は、115.75 分 ( $SD=171.21$  ;  $Me=60.00$ ) であった。

### 本標本における部活動及び委員会の加入状況

部活動に加入していない者は、有効回答 764 名中 149 名 (19.5%) であり、1 年生は 52 名 (13.8%)、2 年生は 97 名 (25.0%) であり、男子は 71 名 (19.3%)、女子は 78 名 (19.7%) であった。部活動や委員会活動において、役職 (主将や委員長、会計など) についている者は有効回答 755 名中 263 名 (34.8%) であり、1 年生は 105 名 (28.0%)、

2年生は158名(41.6%)であり、男子は134名(37.0%)、女子は129名(32.8%)であった。

### 所属する仲間集団に関する結果

友人として挙げた人数は、男子 6.68 人 ( $SD=3.95$ ;  $Mo=5$ )、女子が 4.77 人 ( $SD=3.25$ ;  $Mo=3$ ) であり、先行研究と同様、女子の方が挙げた人数は少なかった。仲間集団に関するかけがえのなさは  $M=4.59(SD=0.79)$ 、重要度は  $M=4.66(SD=0.66)$ 、魅力度は  $M=4.21(SD=0.90)$  であり、いずれも高く、かけがえのなさは有効回答数の 72% (529 名) が、重要度は 75% (551 名) が、魅力度は 47.3% (346 名) が 5 段階の 5 とつけていた。

### 学級内地位認知の測定に関する結果

本研究では、学級内地位認知について、三つの文章から自身の状況にぴたりくるものを一つ選ばせるという方法を用いて、上位群、中位群、下位群の 3 群に分けた。その結果、有効回答 711 名中、上位群 187 名 (26.3%)、中位群 260 名 (36.6%)、下位群 264 名 (37.1%) に分かれた。 $\chi^2$  検定を行ったが、男女間で比率に違いはなかった ( $\chi^2(2)=3.56, n.s.$ )。

以降、各従属変数について、学級内地位認知×性の 2 要因分散分析を行った結果を記し、各条件間の平均と標準誤差を Table 1 に記した。まず、友人数について、学級内地位認知( $F(2,689)=8.82, p<.001, \eta^2=.025$ )、性( $F(1,689)=41.71, p<.001, \eta^2=.057$ )ともに主効果が有意であり、上位群( $M=6.66$ )の方が、中位群( $M=5.36$ )や下位群( $M=5.19$ )より、また、男子( $M=6.64$ )の方が女子( $M=4.91$ )より多かった。交互作用は有意でなかった。

本研究では、上記の測定方法の妥当性を検討する目的で、影響力認知も測定した。まず、学級に及ぼす所属集団の影響力について、学級内地位認知×性の 2 要因分散分析を行ったところ、学級内地位認知( $F(2,696)=34.28, p<.001, \eta^2=.090$ )、性( $F(1,696)=19.46, p<.001, \eta^2=.027$ )ともに主効果が有意であり、上位群( $M=4.01$ )の方が、中位群( $M=3.43$ )より、中位群の方が下位群( $M=3.15$ )より、また、男子( $M=3.68$ )の方が女子( $M=3.29$ )より、自身の所属している仲間集団が学級に及ぼす影響力があると認知していた。交互作用は有意でなかった。

所属集団に及ぼす自身の影響力について、学級内地位認知×性の 2 要因分散分析を行ったところ、学級内地位認知( $F(2,694)=16.96, p<.001, \eta^2=.047$ )、性( $F(1,694)=6.59, p<.01, \eta^2=.009$ )ともに主効果が有意であり、上位群( $M=3.69$ )の方が、中位群( $M=3.20$ )、下位群( $M=3.18$ )より、また、男子( $M=3.45$ )の方が女子( $M=3.26$ )より、所属している仲間集団に及ぼす影響力を自分は持っていると認知していた。交互作用は有意でなかった。

学級に及ぼす自身の影響力について、学級内地位認知×性の 2 要因分散分析を行ったところ、学級内地位認知( $F(2,695)=38.75, p<.001, \eta^2=.100$ )、性( $F(1,695)=15.40, p<.001, \eta^2=.022$ )ともに主効果が有意であり、上位群( $M=3.65$ )の方が、中位群( $M=2.92$ )、下位群( $M=2.80$ )より、また、男子( $M=3.25$ )の方が女子( $M=2.89$ )より、学級に及ぼす影響力を自分は持っているとして認知していた。交互作用は有意でなかった。

### 仲間集団の形成・維持動機に及ぼす学級内地位認知の効果

石田・小島(2009)が作成した尺度を一部、改変したため、改めて因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、2 因子を得た(回転後の分散説明率 53.80%)。抽出順に、消極動機 ( $\alpha=.91$ )、積極動機 ( $\alpha=.90$ ) と命名した。それぞれの因子に高く負荷した項目 (4 以上) を加算し、項目数で除した得点を算出し、分析に使用した。

消極動機、積極動機それぞれに対して、学級内地位認知×性の 2 要因分散分析を行った。消極動機は、学級内地位認知( $F(2,660)=5.27, p<.01, \eta^2=.016$ )、性( $F(1,660)=5.20, p<.05, \eta^2=.008$ )ともに主効果が有意であったが、仮説 2 とは異なり、中位群( $M=2.58$ )が、上位群( $M=2.26$ )より、また、女子( $M=2.50$ )が男子( $M=2.31$ )より、消極動機が高かった。

Table 1 学級内地位認知×性ごとの平均と標準誤差(SE)

	男子			女子		
	上位群	中位群	下位群	上位群	中位群	下位群
友人数 (人)	7.40 (.353)	6.33 (.324)	6.21 (.324)	5.83 (.377)	4.55 (.295)	4.35 (.296)
学級における所属集団の影響度	4.16 (.104)	3.57 (.094)	3.40 (.095)	3.82 (.112)	3.32 (.087)	2.94 (.087)
所属集団内における自身の影響度	3.85 (.097)	3.26 (.088)	3.24 (.089)	3.51 (.105)	3.15 (.081)	3.12 (.081)
学級における自身の影響度	3.80 (.107)	3.03 (.096)	3.02 (.096)	3.51 (.113)	2.82 (.088)	2.59 (.088)
消極動機	2.23 (.111)	2.42 (.096)	2.28 (.098)	2.30 (.114)	2.74 (.088)	2.45 (.088)
積極動機	4.23 (.083)	3.95 (.076)	3.96 (.076)	4.40 (.088)	4.25 (.069)	3.94 (.067)
他グループとの肯定的な関わり	4.16 (.087)	3.84 (.077)	3.66 (.076)	4.11 (.092)	3.95 (.070)	3.62 (.070)
友人関係配慮	3.28 (.086)	3.42 (.077)	3.37 (.075)	2.97 (.090)	3.45 (.068)	3.19 (.069)
関係維持欲求	4.04 (.111)	3.94 (.099)	3.86 (.099)	3.92 (.116)	3.84 (.090)	3.61 (.089)
総合的適応感覚	3.50 (.108)	3.12 (.095)	3.02 (.093)	3.29 (.111)	3.08 (.085)	2.90 (.084)
友人関係因子	4.04 (.079)	3.74 (.070)	3.75 (.069)	4.14 (.082)	3.97 (.063)	3.74 (.063)
学習態度因子	3.29 (.085)	3.05 (.077)	3.41 (.075)	2.94 (.089)	3.00 (.068)	3.28 (.068)
心身不健康因子	2.62 (.115)	2.78 (.102)	3.06 (.100)	2.80 (.119)	3.07 (.091)	3.15 (.091)

note. 分析ごとに欠損値を抜いたので、回答者数は項目によって異なる。

一方、積極動機は、学級内地位認知( $F(2,665)=10.53, p<.001, \eta^2=.031$ )、性( $F(1,665)=5.91, p<.05, \eta^2=.009$ )ともに主効果が有意であり、上位群( $M=4.31$ )が、中位群( $M=4.10$ )、下位群( $M=3.95$ )より、また、女子( $M=4.20$ )が男子( $M=4.05$ )より、積極動機が高かった (仮説 1 を支持)。また、交互作用傾向が見られ( $F(2,665)=2.56, p<.10, \eta^2=.008$ )、中位群において、女子の方が男子より積極動機が高かった。

#### 学級及び仲間集団での自身の意識や行動に関する自己評価に及ぼす学級内地位認知の効果

本研究では、所属している学級や仲間集団においてどのような意識をもったり行動を取ったりしているのか自己評価してもらった。作成にあたっては、「人間関係の感受性」、「他グループとの肯定的な関わり」、「学級内階層性」の 3 因子を仮定した。12 項目について、因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行ったら、3 因子を抽出し



Table 2 学級及び仲間集団での自身の意識や行動に関する自己評価

	因子		
	1	2	3
自分が所属しているグループと一緒にいるときには、自分から関わらないようにしている。	-.676		
自分の所属していないグループの人とも積極的に関わっている。	.628		
自分が所属していないグループの人とも、もっと仲良くしたい。	.612		
自分の所属しているグループの人とだけ関わっていたい。	-.593		
このままの人間関係で学校生活を送りたい。		.805	
このクラスにいる間は、このままの人間関係を維持したい。		.742	
グループの友だちと話しているとき、友だちに話を合わせることが多い。			.627
クラス内の人間関係には常に気を配っている。			.584
クラスにおける自分の人間関係を変えたい。			.460
クラスの雰囲気を壊したくない。			.422
寄与率	18.05%	14.46%	10.08%

note. 第1因子「他グループとの肯定的な関わり」、第2因子「友人関係配慮」、第3因子「関係維持欲求」

た。「相手からのメールや手紙、電話にはすぐ返事をする」、「クラス内の人間関係には敏感でない」がいずれの因子にも負荷しなかった（4以下）ので、除外し10項目について再度因子分析を行い、同様の3因子を得た（回転後の分散説明率42.58%；Table 2）。抽出順に、「他グループとの肯定的な関わり」、「友人関係配慮」、「関係維持欲求」と命名した。分析にあたり、それぞれの因子に高く負荷した項目（4以上）を加算し、項目数で除した得点を算出した。

各因子について、学級内地位認知×性の2要因分散分析を行った。その結果、まず、他グループとの肯定的な関わり（第1因子）は、学級内地位認知の主効果だけが有意であり( $F(2,672)=18.82, p<.001, \eta^2=.053$ )、上位群( $M=4.13$ )が、中位群( $M=3.90$ )より、中位群が下位群( $M=3.64$ )より、他のグループとも肯定的に関わりたと考えていた。友人関係配慮（第2因子）は、学級内地位認知( $F(2,676)=7.37, p<.001, \eta^2=.021$ )、性( $F(1,676)=5.72, p<.05, \eta^2=.008$ )ともに主効果が有意であり、中位群( $M=3.43$ )が、上位群( $M=3.13$ )より、また、男子( $M=3.36$ )が女子( $M=3.20$ )より、友人関係に配慮していた。関係維持欲求（第3因子）は、学級内地位認知の主効果が有意であり( $F(2,681)=3.01, p<.05, \eta^2=.009$ )、上位群( $M=3.98$ )が下位群( $M=3.73$ )より関係維持欲求が高かった。また、性の主効果傾向が見られ( $F(1,681)=3.67, p<.06, \eta^2=.005$ )、男子( $M=3.95$ )が女子( $M=3.79$ )より関係維持欲求が高い傾向が見られた。

なお、因子分析の結果、除外された「相手からのメールや手紙、電話にはすぐ返事をする」、「クラス内の人間関係には敏感でない」のそれぞれも同様に分散分析を行ったところ、前者の項目では、性の主効果がみられ( $F(1,675)=13.28, p<.001, \eta^2=.019$ )、女子( $M=3.79$ )が男子( $M=3.42$ )よりすぐ返事をするとし、後者の項目では、学級内地位認知( $F(2,680)=9.99, p<.001, \eta^2=.029$ )、性( $F(1,680)=5.49, p<.05, \eta^2=.008$ )ともに主効果が有意であり、下位群( $M=3.07$ )や中位群( $M=2.99$ )が上位群( $M=2.58$ )より、男子( $M=2.99$ )が女子( $M=2.77$ )より敏感でないと考えていた。

#### 階層型学級適応感に及ぼす学級内地位認知の効果

本研究では、学級適応感の測定に、三島(2006)の作成した階層型学級適応感尺度を一部改変して用いた。この尺

Table 3 階層型学校適応感尺度（三島，2006）の平均、SE、 $\alpha$  値、相関係数

	平均	SE	$\alpha$	友人関係	学習態度	心身不適応
総合的適応感覚	3.11	.039	.57	.41***	.20***	-.34***
友人関係	3.87	.029	.75			
学習態度	3.17	.031	.59	.13***		
心身不健康	2.95	.042	.65	-.05	.01	

note. 分析ごとに欠損値を抜いたので、回答者数は項目によって異なる。\*\*\*  $p < .001$

度は、友人関係、学習態度、心身不健康の三つの下位因子と、総合的適応感覚からなる。改変したこともあり、各下位因子の平均および標準誤差(SE)、内的整合性及び、相関マトリックスを Table 3 に示した。三島同様、下位因子間の相関は低く、独立していたが、総合的適応感覚とはいずれも有意な相関が得られた。

総合的適応感覚及び下位因子について、学級内地位認知×性の2要因分散分析を行った。まず、総合的適応感覚であるが、学級内地位認知の主効果だけが有意であり( $F(2,664)=9.63, p<.001, \eta^2=.028$ )、上位群( $M=3.40$ )が、中位群( $M=3.09$ )や下位群( $M=2.95$ )より適応感覚が高かった（仮説3を支持）。友人関係因子では、学級内地位認知の主効果が有意であり( $F(2,661)=11.22, p<.001, \eta^2=.033$ )、上位群( $M=4.09$ )が、中位群( $M=3.86$ )や下位群( $M=3.75$ )より友人関係において適応感覚が高かった。性の主効果傾向も見られ( $F(1,661)=3.37, p<.07, \eta^2=.005$ )、女子( $M=3.95$ )が男子( $M=3.84$ )より友人関係の適応感が高い傾向にあった。学習態度因子では、学級内地位認知( $F(2,663)=10.32, p<.001, \eta^2=.030$ )、性( $F(1,663)=7.44, p<.01, \eta^2=.011$ )ともに主効果が有意であり、下位群( $M=3.34$ )が、上位群( $M=3.12$ )や中位群( $M=3.03$ )より、男子( $M=3.25$ )が女子( $M=3.08$ )より学習に対する適応感が高かった。心身不健康因子でも、学級内地位認知( $F(2,665)=6.94, p<.001, \eta^2=.020$ )、性( $F(1,665)=4.98, p<.05, \eta^2=.007$ )ともに主効果が有意であり、下位群( $M=3.11$ )が、中位群( $M=2.92$ )や上位群( $M=2.71$ )より、女子( $M=3.01$ )が男子( $M=2.82$ )より心身不適応感が高かった。

下位3因子が独立していたので、これらを説明変数、総合的適応感覚を目的変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を学級内地位認知×性ごとに行い、総合的な学級適応感に最も寄与しているのはどの側面なのかを検討した。その結果、上位群の男子は友人関係と心身不健康が、女子は友人関係のみが、それぞれ総合的な学級適応感を説明していた。中位群の男子は心身不健康と学習態度が、女子はすべての因子が、それぞれ総合的な学級適応感を説明していた。下位群の男子はすべての因子が、女子は友人関係と心身不健康が、それぞれ総合的な学級適応感を説明した(Table 4)。

Table 4 総合的適応感覚を目的変数とした重回帰分析

因子名	男子			女子		
	上位群	中位群	下位群	上位群	中位群	下位群
友人関係	.35***		.57***	.29***	.41***	.40***
学習態度		.33***	.17*		.20**	
心身不健康	-.32***	-.36***	-.27***		-.34***	-.33***
$R^2$	.28***	.26***	.39***	.09**	.33***	.29***
Adj- $R^2$	.26***	.24***	.38***	.07**	.32***	.28***

note. 分析ごとに欠損値を抜いたので、回答者数は項目によって異なる。\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

## 【考察】

本研究では、中学生を対象に、学級内での社会的地位が、仲間集団の形成・維持動機や、学級及び仲間集団に対する意識や行動、学級適応感に及ぼす効果について検討を行った。社会的地位の測定にあたっては、鈴木(2012)や池田(2013)でそれぞれ、上位層・中位層・下位層、ホット群・ミドル群・クール群の特徴を参考にして作成した文章から自分に最も当てはまるものを一つ選ばせるという方法を用いた。この測定が妥当かどうかを検討する目的で、影響力認知に関して、①学級において、自身が所属している仲間集団のもつ影響力、②所属している仲間集団において自身がもつ影響力、③学級において自身がもつ影響力の三つの質問を行った。その結果、いずれにおいても、上位群の方が、中位群、下位群よりも影響力が強いと認知しており、本研究で用いた測定方法が妥当であるとみなしてよいだろう。なお、①については、上位群>中位群>下位群となっていたが、②と③については、中位群と下位群の差はなかった。このことは、中位群の生徒が個人では影響力を持ち得ないが、仲間集団としてならば下位群よりも影響力を持っていると認知していることが窺えよう。この点に関しては、鈴木(2012)が指摘するように、中学生はグループ間で「地位の差」を把握していることを裏付けていると言えよう。

本研究では、社会的地位各群の生徒がどのような動機や意識をもち、どのような行動をとっているのかを検討することが主たる目的であった。それぞれの従属測度に対する分散分析からは、交互作用（傾向も含む）が積極動機以外みられず、社会的地位の効果が性によって異なっていないことが示唆される。むしろ、複数の従属測度で性差が見られたことから、男女において量的な差があったと見ることができよう。

詳細に従属測度に及ぼす効果についてみると、まず、友人数においては、上位群が中位群、下位群より多く、池田(2013)と同様の結果であった。また、男子より女子の方が少ないという結果も、先行研究と同様であった（e.g., 有倉, 2011, 2015）。仲間集団の形成・維持動機の第1因子であった消極動機は、多重比較の結果、中位群が上位群より高いことが明らかになった。消極動機において中位群が上位群より高いという結果は、中位群の学級における立ち位置を意味するものとして興味深い。つまり、中位群の生徒は、学級や仲間集団において今いる位置から落ちることなく現状を維持したいという消極的な関係欲求をもっていることが窺えよう。もっとも、本標本では、積極動機の方が消極動機より高く評価されており、その意味では、群間の相対的な比較における結果と考えるべきであろう。一方、積極動機は、上位群が中位群や下位群より、女子が男子より、それぞれ高かった。また、唯一交互作用傾向がみられ、中位群において、女子の方が男子より高かった。女子の中位群は男子より自分から進んで関係を作り維持しようとしていることが窺える。

学級及び仲間集団での自身の意識や行動に関する自己評価に関しては、当初想定していた「人間関係の敏感さ」、「他グループとの肯定的な関わり」、「学級内階層性」の因子としてまとまらず、高く負荷した項目を吟味したところ、「他グループとの肯定的な関わり」、「友人関係配慮」、「関係維持欲求」と命名した方が適切であると判断した。また、項目のうち、「相手からのメールや手紙、電話にはすぐ返事をする」、「クラス内の人間関係には敏感でない」の項目がいずれの因子にも負荷しなかった。各因子及び項目における学級内地位認知の効果から、上位群は、現在の仲間集団以外にも積極的に関係を持とうという意識が高く、一方で関係に満足していることからこのままの学級、仲間集団を維持したいという欲求を持っていることが窺える。中位群は、上位群よりは低い（他の仲間集団とも関係を持とうという意識があるがその一方で、現在の学級の人間関係や雰囲気を変えないよう配慮していることが窺



える。下位群は、他の2群と比べると現在の仲間集団への志向性が高く、学級内の人間関係には敏感でないと考えられていることが窺える。

学級適応感覚については、三島(2006)を用いたが、この尺度では、友人関係、学習態度、心身不健康の下位尺度と、上位の総合的適応感覚から構成されている。三島同様、下位尺度間の相関は低く、一つを除いて無相関であったが、総合的適応感覚とは全て有意な相関が得られた。学級適応感覚の分析から各群の特徴を記述してみると、まず、上位群は、学級において最も総合的適応感覚、友人関係が他の2群より高く、女子においては友人関係のみが総合的適応感覚を説明していた。中位群は、下位群と同程度の総合的適応感覚であり、男子の友人関係以外、すべての下位尺度が総合的適応感覚を規定していた。下位群は、学習態度及び心身不健康が上位群や中位群より高く、男女とも友人関係の説明力が高いことが示唆された。

### 本研究の成果と今後の課題

本研究の成果としては、学級内での社会的地位の測定を、複数の項目から構成される尺度ではなく、特徴を記述した文章の中から自分に当てはまるものを選ばせるという手法を用いて、生徒の仲間集団に対する関係動機や意識、行動、そして学級での適応感覚の点から、学級内での地位認知による違いを記述できたことが挙げられる。鈴木(2012)や池田(2013)によってこれまでに明らかにされた各地位の特徴に、新たな知見を加えることができたと思われる。また、これまでの研究が首都圏の中学生を対象にしていたが、本研究では地方都市を対象にしたということで、スクールカーストという現象とまでは言えないが、学級内の暗黙知としての地位認知が広く行き渡った現象であることを改めて確認することができたと言えよう。

本研究の課題としては、首都圏の中学生を対象にした先行研究をもとに作成された学級内地位認知に関する特徴が、果たして本当に地方都市の中学生に当てはまるのかという点である。例えば、下位群には、鈴木(2012)で示唆されている「オタク」、つまり、流行に左右されない特定の趣味を楽しむことが好きであるという特徴が示されていた。ただし、「オタク」をそのまま使用すると、バイアスがかかって選択されない恐れがあるため、このような穏やかな表現にした。この他にも、イケてる人とか、イタイ人などの表現が特徴を表す言葉として挙がっていたが、同様の理由で使用しなかった。その意味で、本研究で使用した社会的地位認知はスクールカーストとは必ずしも同一の概念とは言えない。また、本研究では分散分析の結果に偏 $\eta^2$ 値を付記した。複数の従属尺度において、地位認知及び性の有意な主効果が認められたものの、その効果量は決して大きいとは言えないことを付け加える必要がある。

今後の検討課題としては、個人の地位認知のみを尋ねているので、所属している仲間集団の構成が不明であることが挙げられる。例えば、上位群だと思っている生徒の仲間集団は学級において上位群のメンバーから構成されているのかはわからない。本研究からは、上位群の生徒は中位群の生徒より、中位群の生徒は下位群の生徒より所属している仲間集団の影響力を強いと認知していたことを鑑みると、同じ地位のメンバーで構成されている可能性は示唆されよう。今後は、Pattiselanno ら(2015)の知見も参考にして、所属する仲間集団の特徴も測定できる工夫をしていく必要がある。

### 【引用文献】

Borgatti, S. P., Everett, M. G., & Johnson, J. C. (2013). *Analyzing social networks*. London: Sage.

- Garandeau, C. F., Lee, I. A., & Salmivalli, C. (2013). Inequality Matters: Classroom status hierarchy and adolescences' bullying. *Journal of Adolescence* (DOI 10.1007/s 10964-013-0040-444), 2257-2274.
- Garandeau, C. F., Ahn, H., & Rodkin, P. C. (2011). The social status of aggressive student across contexts: The role of classroom status hierarchy, academic achievement, and grade. *Developmental Psychology*, 47, 1699-1710.
- 池田曜子 (2013). 学級内における仲間関係: 子どもたちの所属集団同士の差異化戦略 奈良女子大学人間文化研究科年報, 28, 173-189.
- 石田靖彦・小島 文 (2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連～仲間集団の形成・所属動機という観点から～ 愛知教育大学研究報告(教育科学編), 58, 107-113.
- 三島浩路 (2006). 階層型学級適応感尺度の作成—小学校高学年用— カウンセリング研究, 39, 81-90.
- 森口 朗 (2007). いじめの構造 新潮新書
- Pattiselanno, K., Dijkstra, J. K., Steglich, C., Vollebergh, W., & Veenstra, R. (2015). Structure Matters: The role of clique hierarchy in the relationship between adolescent social status and aggression and prosociality. *Journal of Adolescence*, 44, 2257-2274.
- 鈴木 翔 (2012). 教室内カースト 光文社新書
- 鈴木 翔・須藤康介・荒川智美・寺田悠希・澁谷功太郎 (2011). 恋人の有無が中学生の意識に与える影響 —「恋人のできやすさ」に着目して— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 103-116.
- 有倉巳幸 (2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 21, 161-172.
- 有倉巳幸 (2015). 中高生版仲間集団排他性尺度の開発, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 24, 227-237.

注1) 本論文は、著者が指導した森聖恵(鹿児島大学教育学部平成26年度卒)が卒業研究で収集したデータを用い、執筆にあたり再分析を行った。

注2) 数名の外れ値があったため、中央値(Me)を載せた。実態を捉える上では平均値より信頼性があると言える。なお、以下の分析も同様である。

## Appendix 学級内地位認知の測定に使用した文

### 上位群

私は、クラスで話し合いをしたり意見を述べたりするとき、皆が注目してくれるので自分の意見が通りやすい方です。授業やグループ活動では、流れに合わせて発言をして、クラスの雰囲気を読み取れていると思います。周りの注目をうまく集めることができ、学校の先生と話すときは、気軽に冗談を言うなどして親しく話すことができます。比較的流行には敏感なほうだと思います。

### 中位群

私は、クラスで話し合いをしたり意見を述べたりするとき、意見が通らないことがあるので、周りの意見に合わせる必要があります。授業やグループ活動では、先生の指示があった時や必要がある時に時々発言します。学校の先生と話すときは、普通に接することができます。クラスの中で中心になっている話題や、皆が話題にしていることに合わせて行動していくほうだと思います。

### 下位群

私は、クラスで話し合いをしたり意見を述べたりするとき、周りの意見に合わせることも多いのですが、クラスの雰囲気に合わせにくいと感じることもあります。授業やグループ活動では大人しくしていることが多く、必要ある場合に発言します。学校の先生と話すときは、丁寧な敬語を使うようにしており、緊張してうまく話せなくなることがあります。流行に左右されない特定の趣味を楽しむことが好きです。